大阪府副知事

小河 保之さんに伺いました

OGAWA Yasuyuki

40年近くにわたって大阪府の都市整備を担い、現在は大阪府副知事としてご活躍の小河保之さんに、府政改革の現状や土木技術者としての心意気についてお聞きした。

2009年6月17日(水)
大阪府副知事室

知事が変わって情報公開が画期的に進んだ

――2008年2月に38歳(当時)の橋下徹大阪府知事が誕生し、以来府政で変わられたと感じるものはありますか。

小河――現在大阪府では、現知事の下、「財政再建」、「政策創造」、「府庁改革」の三本柱で、従来の慣行や枠組み、既成組織のしがらみを断った大胆な改革を進めています。特に大きく変わったと感じるのは、府庁改革のなかの情報公開です。部長会議や予算の折衝などを報道機関にオープンにしています。最初は各部長がそんな雰囲気の中で話せるかと思ったのですが、言うべきことを言っているか職員からもチェックされますので、今はみんな平気で話しています。反対意見も、きちんとその場で言おう、という意識が強くなりました。

大阪府のホームページでは、施策の意思決定過程も含め、ほとんどの会議の発言がわかるようになっています。

――橋下知事は、新名神高速道路などのインフラについても土木技術者の主張を理解していただいているようですが。

小河――必要な社会基盤整備は、厳しい財源のもとでも未来への投資として、着実に実施すべきであると知事には理解してもらっています。それが新名神高速道路を含むミッシングリンク(不連続としている区間)です。

特に新名神は、国土軸を形成するため、国家戦略として整備する必要があります。

しかし今回の国幹会議(国土開発幹線自動車道建設会議)では以前に整備が必要とされていなかった路線が認められ、新名神の凍結が解除されなかったので知事を含めた関係者が解除を訴えたのです。

もう一つ提案しているのが、都市圏の自動車専用道の管理主体の一元化です。

京阪神都市圏の自動車専用道は、建設を担ってきた西日本高速道路(株)、阪神高速道路(株)、地方道路公社が、各路線の管理主体となり、それぞれが料金設定をしています。このため料金体系が整理されずに、利用者に高い料金を支払わせる結果となっています。管理主体を一元化することで、適正な料金設定が可能となります。道路行政の「つくる側の論理」から「利用者側の論理」への転換です。

土木にはつくる喜びと創造する喜びがある

――都市整備を考えるうえで、土木技術者にとって一番大切なことは何だとお考えですか。

聞き手
松島 格也
元・編集委員
松田 曜子
編集委員
[writer] 駒崎 文男
[photo] 松島 格也

小河――土木技術者にとって大切なことは、先人たちがつくってきたものを維持管理し、改良して、次の世代につなげていくことです。また、技術者は常に地域や現場に立脚して、技術力を発揮すべきです。社会基盤のストックが不足していた時代の土木技術者は、ひたすら建設することが喜びでもあったと思います。もちろん、現在でもつくること、つまり「コンストラクション」の喜びを求めることは変わりませんが、さまざまな工夫や仕掛けで、社会の仕組みを変え、社会を良くしていくという「クリエーション」の喜びを追求していくことも必要と思います。大阪府の、その一つの取組みが、アドプト・ロード・プログラムです。アドプトとは、〝養子にする〟という意味ですが、道路の一定区間の管理を地域の人たちや企業にお任せし、花を植え、美化を進めてもらう。最近ではそれが、アドプト・リバーやアドプト・シーサイド、アドプト・フォレストへと広がっています。まさに、府民協働、地域協働、企業協働です。周りが変わっていくと、みんなが関心をもち、地域の人たちが自分たちで育てていくようになり、さらに良くなっていきます。

また、「将来ビジョン・大阪」のなかで、海と山が近い大阪の特徴を活かして「みどりの風を感じる」大都市にするため、土木技術者だけでなく、府庁内の技術職それぞれの力を活かして、具体的な施策の検討を行っています。

小河保之（おがわ・やすゆき）さん プロフィール
1947年生まれの62歳。1969年京都大学工学部卒業、同年大阪府入庁。大阪府土木部副理事兼同道路課長、大阪府土木部長、大阪府危機管理監などを経て、2007年3月退職。同年7月から大阪府副知事就任。

土木技術者としての〝根〟をもつことが大切

――最後に今後土木界を支える若い人に対してメッセージをお願いします。

小河――土木技術は、今はどんどん技術的には進化しています。しかし、土木技術者は、地域と技術に立脚し、「私たちの使命は何なのか」、「何を実現していくのか」ということを常に考えることが大切です。土木技術者としての哲学をもち、迷ったら、必ず一度そこにフィードバックして考えていくことだと思います。

若い人にはよく「当たり前のことが、当たり前にできて、当たり前になるな」と言っています。専門のことだけでなく世の中や、人間としての勉強もしないといけない。専門分野の井戸を深く掘ると同時に、井戸を何本も掘れたら一番いい。

そして、「チャレンジ、先手必勝、プラスアルファの知恵」を忘れないでほしい。単に言われたからやるのではなく、常に自分からチャレンジする。しかも先手を取る。さらに、自分がかかわったら、何か自分の色をそこにつける。世の中の流れを見ていたら、こうすべきやという考えが出てきます。土木技術者としてぜひそういう気持ちをもって、自分の個性を現場に活かしていってほしいと思います。

――本日はお忙しいなかありがとうございました。